



名古屋柳城短期大学

ちやべるにゅーす

第4号

2002年10月1日



数年前、「センス・オブ・ワンダー」という本に出会った。この本の著者、レイチェル・カーソンは、「歴史を変えることのできた数少ない本の一冊」と称されることになった「沈黙の春」を世に出したことで有名である。この本の執筆中、彼女はガンにおかされており、時間との戦いのなかで、環境の汚染と破壊の実態を世にさきがけて告発したのである。1962年の発表当時、大きな反響を巻き起こし、世界中で農薬の使用を制限する法律の制定を促し、多くの人々に地球環境への関心を呼び起こした。

さて、「センス・オブ・ワンダー」は、56歳で亡くなった彼女の最後のメッセージである。彼女は、先の本を発表することによって、想像を絶する企業や政治の社会からの軋轢の中で果敢に生き抜いたのであるが、この本は、この戦いの最後に、静かに静かに語られた彼女の「遺言」でもある。

私は、彼女の研ぎ澄まされた文章の一言一言が宝石のように思え、何度も読み返している。そのなかの一節を引用してみる。

人間を超えた存在を認識し、おそれ、驚嘆する感性をはぐみ強めていくことには、どのような意義があるのでしょうか。自然界を探検することは、貴重な子ども時代を過ごす愉快で楽しい方法のひとつにすぎないのでしょうか。それとも、もっと深いなにかがあるのでしょうか。

わたしはそのなかに、永続的で意義深いなにか

があると信じています。地球の美しさや神秘さを感じとれる人は、科学者であろうとなかろうと、人生に飽きて疲れたり、孤独にさいなまれることはけっしてないでしょう。たとえ生活のなかで苦しみや心配ごとにであつたとしても、かならずや、内面的な満足感と生きていることへの新たなよろこびへ通ずる小道をみつけたすことができると信じています。

地球の美しさについて深く思いをめぐらせる人は、生命の終わりの瞬間まで、生き生きとした精神力をたもちつづけることができるでしょう。

創世記のはじめに、「神はお造りなつたすべてのものをご覧になつた。見よ、それは極めて良かった。」とある。創られた神ご自身が満足されたこの世界であつた。しかし、人類

の歴史は、後戻りできない過ちを犯してきた。私たちは、この地球をこれ以上傷めつけないように、そして、この地球という星に住む人々がお互いにこれ以上傷つけあうことのないように、新しい創造の業へ参与していくことができたらと思う。「センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目をみはる感性」の心をもちながら、そして小さな力を出し合つて。

レイチェル・カーソン著、上遠恵子訳
『センス・オブ・ワンダー』、1996年、新潮社



センス・オブ・ワンダー その心

本学教員 尾上明子

合同礼拝報告

呪縛からの解放

～元ハンセン病者とその家族の名誉回復を～

日本聖公会九州教区執事
菊池黎明教会牧師補
太田国男

お話のタイトルは「呪縛からの解放」ですが、少々ショッキングなイメージを抱かれたのではないかと思います。しかし、ハンセン病の歴史は、天刑病、業病、不治の病と、呪いとも言える謂れ無き偏見と差別がこの病軀を拘束しつづけてきました。まさに呪縛の歴史でした。その歴史の中で私が辿って来た半生の一端、特にハンセン病の自覚症状が現われた、10歳当時（小学校3年生のとき）から今日に至るまでの、ハンセン病ゆえに辿った「呪縛と解放の半生」をお話しようと考えています。

本病の自覚症状に気づいたのは、第2次世界大戦が始まった年（1941年）でした。当初の自覚症状は体がとてもだるく感じたことでした。やがて眉毛が年毎に薄くなり、遂に脱毛してしまいました。その事を知った両親は「お前もとうとうらい病になってしまったのか？」と吐き出すように、ため息混じりに呟いていました。そのひどく落胆した様子が印象深く、今も鮮明に脳裏に焼き付いています。年毎に病状も進み、右の指が湾曲し始め、誰の目にもハンセン病だと分かるようになりました。それからは色々な差別的な言葉を投げかけられ、学校の担任の先生からは「お医者さんから、この病気は伝染しないという証明書を貰って来なさい」と言われました。現在もあります中村の赤十字病院へ行き、その院長先生、確か田代医学博士だったと思いますが、その先生から「この病気は伝染しないので、通学・共学に支障ない」という証明書を

発行してもらって学校へ提出しました。しかし、その証明書には何の効力もなく、友だちからは仲間外れにされるし、段々苛めがエスカレートして、学校へ行くのが辛くなり、小学校6年生修了を最後に学校へ行くのを止めました。その後は、家の手伝いをしたり、2年間通院していた日赤病院で知り合った友達二人で映画館のはしご等をしたりして、名古屋界限で時間をつぶしたりしていました。



やがて第2次世界大戦が終結し（1945年）、その翌年、群馬県の草津温泉の近くにある国立ハンセン病療養所・栗生楽泉園へ先に入院していた長男の兄が危篤状態だという電報が入りました。そのために、父親が私を連れて行くということになりました。たとえ死に掛かっていたとしても、自分を小さいときから可愛がってくれた兄が生きているうちに、私を連れて行ったほうが、私のためにもよいだろうと言うのが両親の思いであったようです。そのため私は父に連れられて群馬県の療養所に入所するようになり、故郷・我が生家・我が家族とも別れることになりました。近所の人々から隠れるようにして、母と姉二人に見送られて向かいました。敗戦直後の汽車の旅はとても大変で、やっとの思いで、危篤状態で床に臥している兄がいる部屋にたどり着きました。1946年2月20日の事でした。

兄は危篤状態とは言え、まだ意識がハッキリしていたので、父親は兄に私の事を宜しく頼むと伝え、一泊した後帰りました。父が帰った後、私を小さいときから可愛がってくれた兄ですから、兄から「くに、今夜は俺と一緒に寝てくれないか？」と頼まれました。しか

し、私は、「今日はまだ旅の疲れがあるから、明日」と兄の頼みを断りました。そして毎日、断り続けていて、一週間後、兄は40年の生涯を閉じました。私は肉親との別れの悲しみに加えて、後悔の念に打ちひしがれました。死の床から願う、兄の願いを叶えてやれなかった事で、胸を痛めました。私は、ひどく変形していた兄の顔が怖かったのです。

私が入所したのは、15歳の時でしたが、敗戦直後の療養所での生活は、それは大変なものでした。元気な者は、ストーブ用の薪を15キロ前後担いで何キロも歩いたり、食糧難を補うために、急坂な山肌を開墾したりと、多くの入所者が病状を悪化させ、その結果、後遺症も多く残りました。そんな療養所の窮状を補い支えてくれたのは、外国からの救援団体からの物資でした。療養所内のキリスト教会には、海外のクリスチャンからの物資・プレゼントがたくさん届いていました。そんな折、草津でハンセン病者の救済に献身されたミス・コンウォール・リー女史の導きによって戦前からクリスチャンであったあるご夫妻に出会い、また一人の若い療友が自殺したことをきっかけに、いのちの尊さを教えられ、私もクリスチャンになりました。入所2年後に信仰に導かれたのです。その後は、教会活動や生活改善という名の政治的な社会活動に加わりつつ、岡山の長島愛生園に設立された「長島聖書学舎」に入学し、1963年から3年間聖書の勉強をしました。



卒業後は、再び栗生楽泉園の母教会（聖慰主教会）へ戻り、長島愛生園時代に知り合った女性と結婚しました。私よりも25歳も年上

でしたが、療養所ではそのような年齢差は余り珍しくありませんでした。彼女は医者^の誤診でハンセン病ではないにもかかわらず、そうだとされて療養所生活をしなければならなかった人でした。母親のような連れ合いには、一時が万事お世話になりました。信仰的にも大先輩でした。その最愛の連れ合いにも1982年に先立たれました。その後、熊本・菊池黎明教会から招聘^{しょうへい}の話があり、1984年に熊本の菊池恵楓園へ転園しました。それから19年になります。このように半生を振り返ってみますと、私はハンセン病を患うことによって、その病軀に、その偏見・差別という呪いに拘束されてきましたが、神の恵の福音に出会い、解放者・キリストの解放の福音^{あすか}を信じることによって、まず魂の解放に与りました。その魂の解放がなかったら、今日のような前向きな生き方は出来なかったと思います。最近の流行語に「居場所」というのがありますが、復活のいのちに生かされる存在、私の居場所はここにあることを知っておいて頂きたいと思います。

最後に、私の半生を振り返るとき、ハンセン病は、謂れ無き偏見によって差別される病であることが分かります。ハンセン病は不治^{だいふうし}の病ではなかったのです。大風子油でも治り、自然治癒もありました。1873年に、ノルウェーのハンセンによって「らい菌」が発見されたとき、伝染性が極めて弱いことが分かっていました。またその後も、スファルミンという薬、また1941年にアメリカで新薬プロミンによる治療が始まると、それはまさに「不治の病からの解放」でした。しかし、日本においては、1931年の「癩予防法」とそれに伴う「患者狩り」、愛知県の民間運動が発端となった「無らい県運動」など、国を挙げて国策としてハンセン病に対する恐怖心・嫌悪感をいわずらに煽り立てて隔離と差別が行われました。しかし、不治の病からの解放を求めて、全国の療養所の入所者は運動を続け、その長い運動の成果ともなったのが1996年の「らい予防法」廃止でした。更に、「ハンセン病違

憲国家賠償判決」は、国策レベルの隔離政策を断罪し、2001年5月25日にそれが確定することによって、人間回復・名誉回復を保証する、謂れ無き偏見・差別からの解放が訪れました。勿論、国家・国策レベルの過ちは容易には払拭されないのは事実です。しかし、「謂れ無き偏見と差別、その逆もまた真なり」という人の思い（心）の中にある「謂れある偏見」の差別意識があることもまた事実です。偏見・差別は、親から子へと、子から孫へと受け継がれます。「謂れ無き偏見」を無くすために、そのような間違った情報の伝達を教育し啓発する必要があります。しかし、「謂れある偏見」は、非常に難しいものです。死を目前にした兄の頼みを断ってしまった私自身がそれを深く感じています。兄の顔が恐ろしかったのです。今は私自身の顔が兄と同じように醜くなっている。しかし、だからこそ、隠すことをせず、その顔をいとおしく受け止めなければと思っています。

人間回復・名誉回復は保証されましたが、故郷に帰ることは様々な理由で現在でも困難です。私は、だからこそ、「謂れある偏見・差別」からの解放を悲願として、「呪縛からの解放」をスローガンに、故郷の親族そして皆さんから「お帰りなさい」と笑顔で迎えられる日が来ることを願ってやまないのです。

☆7月17日(水)合同礼拝での太田先生のお話は、1時間を越える内容豊かなものでした。紙面の都合上、菅原裕治が編集し、太田先生の校正・了承を得て掲載しています。

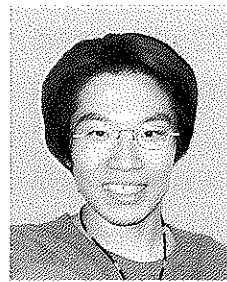
☆合同礼拝の際の献金は、合計33,000円となりました。礼拝後、太田国男先生の今後の活動のために、先生にお渡しいたしました。ご協力に感謝します。

☆太田先生の講演は、日本聖公会中部教区ハンセン病患者・元病者人権回復支援連絡会の主催で、愛知、長野、新潟で行われました。

☆太田先生のホームページ「緑の牧場@菊池黎明教会」にアクセスしましょう。

<http://www.try-net.or.jp/~ohta/>

心のバリアからの解放



保育科2年
原 幸平

人には目に見えない心のバリア（障壁）があります。そのバリアは「無

知」というところから生まれてくるように思います。

私がハンセン病のことを初めて知ったのは、以前に古本屋で購入した『いのちの初夜』という一冊の小説を読んでからでした。読んだことのある方は判ると思いますが、療養所と呼ばれた施設での生活が生々しく描かれており、戦慄を覚えたと同時に「いのちの光」を深遠から垣間見たように記憶しています。

そんな折にテレビで元ハンセン病の方を見て更に大きな衝撃を受けました。その方は目・耳・鼻・口といったところが削ぎ落ちたようになって、ポッカリと穴があいている状態でした。ヒューヒューと痰を詰まらせながら、言葉にならない言葉を懸命に発している姿を見たとき、可哀想だとか、この人も生きた一人の人間なんだというよりも先に、うわっと正直に言って拒否的な感覚を覚えました。しかし、番組が終わる頃には、普通に感動できる番組として捉えることが出来ました。

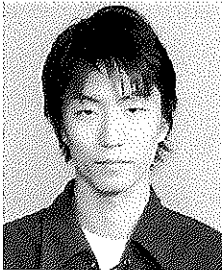
このように人間は、知ること・見ること・経験することから心のバリアを乗り越えられるのではないかと思います。ただし、ここで大切となることは、私たちの方から正しい真実を知ろうと歩み寄ることだと思います。

私が太田国男さんの合同礼拝でのお話を伺って最も印象的であったのは、「自分の顔を自分で見るのが一番嫌いだ」という言葉でした。そんな太田さんが、自らの後遺症を持った素顔を晒してまで伝えたいこと、偏見と差別の歴史、謂れある偏見と差別から、人々の「心からの理解」をもって真に人間回復を果たしたいという思いを真摯に個々人が重く受け止めていく必要があるといえるのではない

でしょうか。

私自身、これからも様々な人たちとの出会いの中で、心のバリアを解放していくことが出来たらと思います。

太田先生との出会い



専攻科介護福祉専攻
森本哲也

私が太田先生に会ったのは、合同礼拝前日の7月16日のことでした。

三好先生から介護専攻科に「太田先生という元ハンセン病の方と、食事をするようになっていますが、良ければ一緒にどうですか」という、アナウンスがありました。私はハンセン病に関してニュースで「小泉さんが訪問しました。」というほどの知識しか持っていなかったもので、こんなチャンスは一生のうちに、何回もないと思い参加することにしました。

柳城の校門の前で待ち合わせだったのですが、近づくにつれ「おっかない顔」の人が見えてきました。それが太田先生の第一印象でした。

食事の席では、よく食べ、タバコをそれ以上に飲み、イメージと大分違うと思いました。そして、ハンセン病についての話をなさるのかと思っていたのですが、ハンセン病のことは話しをせず、名古屋の昔のこと、自分の子どものころの思い出、お兄さんの話でした。私は正直もっと突っ込んだ話をするかと思っていたので、気をそがれたような気もしました。私のハンセン病患者のイメージは、とても過酷な過去がある、というイメージであったので、元気でパワーに溢れている太田先生に驚きました。

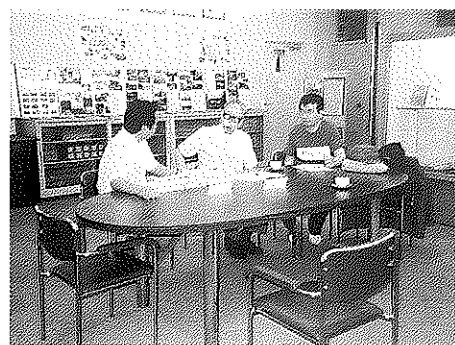
数日後、柳城短期大学のハンセン病パネル展があり、見に行ったのですがその内容は驚くものばかりでした。特に一つ気になったことがあります。昭和から平成が変わるときに、ハンセン病元患者の方たちがいる施設の開放

があったのです。その記事を読んでもみると、減刑という文字が見えたような気がします。ハンセン病は病気であるにもかかわらず、そのような国からの扱いを受けてきました。そうであるのに、太田先生のパワーというのは、どこから生まれてきているのかと思いました。その「おっかない顔」で講演することは、とても勇気の要ることだと思います。私も偏見は持っています。しかし、太田先生のような方と話ができて、偏見というものが無くなったような気がします。それが、私の太田先生との出会いの中での、私にとっての一番の出来事であると思います。

☆ハンセン病に関するパネル展

合同礼拝に伴い、7月11日(木)～19(金)にハンセン病に関するパネル展が本学歴史資料室において行われました。ハンセン病の歴史に関するパネル約30枚と、新聞記事、各施設の紹介など数多くの資料が展示されました。

このパネル展は、日本聖公会中部教区との共催事業(一般公開・無料)として行われ、本学内外の方々の約300名にご覧頂きました。また、これらのパネルは、ハンセン病患者とその家族の人権回復・名誉回復を支援している方々から無償でお貸し頂きました。



キリスト教Q & A



名古屋聖マルコ教会
司祭ペテロ渋澤一郎

Q. イエス・キリストって「イエス」が名前で「キリスト」が名字なのですか？聖書では

「キリスト・イエス」と書いてあるところもあります。

A. 「イエス」は名前ですが、「キリスト」は名字ではありません。「イエス」は個人の名前を表す固有名詞で、日本語でいうと「太郎」とか「花子」に当たります。ヘブル語では「ヨシュア」と言い、「神は救い」という意味です。このヨシュアのギリシア語読みがイエスとなるのです。「キリスト」は普通名詞のギリシア語で、「救い主」という意味です。ヘブル語では「メシア」と言い、「油を注がれた者」という意味です。王や祭司、預言者がその職に付く時、頭に油を注がれたところから来ています。ですから、「イエス・キリスト」は「救い主であるイエス」という意味になり、単に名前を表しているのではなく、その言い方の中に「救い主であるイエスを信じる」という意味を含んだ信仰告白的な言い方ということが言えます。「キリスト・イエス」という言い方も言葉の順番は逆ですが意味的には全く同じです。

Q. 新約聖書の福音書はイエス・キリストの生涯や教えを記したものだと言われますが、どうして4つもあるのですか？みんな内容が違うのでしょうか？

A. 福音書にはマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの4つの福音書があります。元々福音書と呼ばれるものはもっとたくさんあったようです。しかし、この4つがイエス様の記録とし

ては最も信頼され、多くの教会で読まれており、最終的に新約聖書の福音書として認められました。内容的にはイエス・キリストについて書かれている点では同じだと言えますが、4つともそれぞれみんな違いがあります。ただ、最初の3つの福音書は内容的にかなり共通する部分が多いので、一般的に共観（きょうかん）福音書と呼ばれています。どうして共通する部分が多いかと言いますと、聖書学者の方々の大体一致した意見として、「マルコによる福音書」が一番最初に書かれ、それを参考にしてマタイやルカが福音書を書いたからではないかと言われています。ただし、マタイとルカは基本的にはマルコに従いながら、それを丸写しするのではなく、そこにマルコにはない別な資料を加え、自分の考え（キリスト理解）に従って福音書を書いているのです。「ヨハネによる福音書」は、イエス様の言葉が中心になっており、他の福音書とは随分傾向が異なっています。

おしらせ

10月以降の礼拝
お話担当者・奏楽者

お話

| | |
|-------------|-----------|
| 10月2日：土井司祭、 | 9日：菅原先生、 |
| 16日：卒業生、 | 23日：菅原先生、 |
| 30日：大江司祭 | |
| 11月6日：鈴木先生、 | 13日：菅原先生、 |
| 20日：菅原先生、 | 27日：チョン司祭 |
| 12月4日：菅原先生、 | 11日：尾上先生、 |
| 1月8日：菅原先生、 | 15日：塚田局長、 |
| 22日：田浦学長 | |

★12月18日はクリスマス礼拝です。

奏楽者

1年生：尾関恵利香、伊藤美由希、加藤美香、
佐藤美月、疋田有香、浅井千佳
2年生：加藤美穂、真辺里美、加藤菜々、
渡邊真以、岡本由香里

2002年10月1日発行 第4号

発行所 名古屋柳城短期大学
名古屋市昭和区明月町2-54

編集兼
発行者 名古屋柳城短期大学 宗教委員会

印刷所 株式会社 丸和印刷



この印刷物は再生紙を使用しています。